

# 02 歴史展示の具体的内容

歴史ストーリー

## テーマストーリー 〈仏教の展開〉

語り部 行基・良弁

# ＜仏教の展開＞ 概要

明日香において、氏族仏教から国家仏教へと転換を図った仏教信仰は、奈良時代になって国家仏教の色彩をさらに強めます。疫病の流行や天災・政争の続発等による社会不安の増大という背景のもと、その解消に向けた大仏造立という国家的プロジェクトが推進されていきました。仏教が政治、経済、文化、庶民の生活等に大きな影響を及ぼしていた奈良時代の仏教の展開を紹介します。

## 【1】平城京遷都と仏教

平城京遷都に伴い、役所や貴族の邸宅などとともに主要寺院も明日香から移され、興福寺、薬師寺、元興寺などが建てられました。また長安の西明寺を模した官大寺の建立も企画され、唐から帰国した道慈の尽力により藤原京の大官大寺を移転して大安寺が造営されました。天武天皇によって提唱された国家仏教としての仏教興隆の動きは、唐との直接交流を通じて飛躍的に進展していくことになります。その中心的役割を果たしたのが大安寺でした。



## 【2】社会福祉と仏教

平城京造営や諸税の負担に苦しむ農民たちが、京の内外で行き倒れになることが多く見られましたが、政府の対策は十分ではありませんでした。そうした中で道昭や行基は、池溝橋の開発の指導や布施屋の設置など独自の社会福祉活動を行いました。政府の弾圧を受けながらも、それらの活動の輪は民衆の支持を受けて広がっていきました。また光明皇后も深く仏教に帰依して悲田院や施薬院を設置するなどの福祉活動を展開しました。



## 【3】鎮護国家と大仏造立

天然痘の大流行や地震、飢饉、政争の続発などにより社会不安が増大していました。聖武天皇は、仏の加護による国家安泰を願うようになり、全国に国分寺・国分尼寺を建立するとともに、都に大仏を造立することを提案します。民衆の強い支持を集める行基の助力を得て、この国家プロジェクトを推進し、752年、東大寺に大仏が完成しました。インド僧・菩提僊那を導師として、大仏開眼供養会が盛大に開催され、鎮護国家の思想が具現化されました。



## 【4】鑑真和上の渡来

国家事業として全国に寺院が建立されていきましたが、正式な資格を持たない私度僧が増え、僧侶の養成と資質向上が課題となりました。そこで中国から高僧を招くために、栄叡と普照が中国に渡りました。そして難航した交渉の末、苦難を乗り越えて鑑真の渡来を実現しました。鑑真は東大寺戒壇院などで授戒を行い、わが国の仏教興隆に尽力しました。そして鑑真のために唐招提寺が建立され、僧侶たちの修行の場となりました。



## 【5】称徳天皇と仏教

再び皇位に就いた称徳天皇は道鏡を重用し、仏教の思想に基づく政治を展開しました。西大寺や西隆寺の造営、百万塔の製作を行うなどの仏教政策を推し進めます。一方で神社に対する保護政策や統制も強化し、伊勢神宮や宇佐八幡宮内に神宮寺を建立するなど神仏習合が進みました。天皇が亡くなると道鏡は失脚し、行きすぎた仏教政策は見直されることになりましたが、鎮護国家の思想は最澄や空海に受け継がれ、平安京遷都とともに新たな展開を見せて行くことになります。

## 人物を中心とするエピソードストーリー

奈良時代の仏教史の展開の中で特徴的に登場する5人の人物にスポットをあてて、その人物に関するエピソードを交えたストーリーという切り口で、語り部の行基と良弁が、時代の移り変わりを解説します。

### 〈道慈〉～奈良仏教の殿堂・大安寺～

天武天皇によって企図された「国家仏教」の流れは奈良時代にも受け継がれ、平城京遷都によって移された大官大寺が大安寺と名を変えて、仏教興隆の中心的存在に位置づけられました。唐で仏教を学んだ道慈は、大安寺を長安の西明寺のような「仏教の殿堂」にしようと考え、その整備に尽力しました。そして大安寺は、奈良時代の半ばには、菩提僊那や道璿、仏哲らの来日高僧を始め、国内外から880人を超える僧たちが集う仏教興隆の中心寺院として繁栄しました。

〈登場人物〉 道慈、天武天皇、藤原不比等、行基

### 〈光明皇后〉～観音様になった女性～

国家仏教の進展に伴い、僧侶の活動も国家的事業に限定されていました。しかし、道昭や行基など一部の僧は、布施屋の設置や治水・架橋といった土木工事の指導などの社会福祉活動を通じて、一般民衆への布教を行いました。それに共感を覚えた光明皇后は、悲田院・施薬院の設置や浴場の開放といった救済活動を行い、人々から「観音様の化身」と讃えられました。法華寺の十一面観音像は、光明皇后を仏として崇めて作られたとも伝えられています。

〈登場人物〉 光明皇后、道昭、行基、和気虫虫

### 〈聖武天皇〉～東大寺の四聖～

天災、疫病、反乱と相次ぐ国難に心を痛めた聖武天皇は、すべての人々の心の拠り所となるような盧舎那大仏を造ろうと決意します。しかもそれを国家権力ではなく、民衆一人一人の力を合わせて成し遂げたいと願い、僧行基に協力を要請しました。大仏造立の地をめぐるの紆余曲折はありましたが、752年、東大寺に大仏が完成し、開眼供養会が盛大に開催されました。鎮護国家の思想のもと、大仏造立を発願した聖武天皇は、勸進に奔走した行基、開眼の導師を務めた菩提僊那、東大寺の初代別当となった良弁とともに「東大寺の四聖」と呼ばれました。

〈登場人物〉 聖武天皇、光明皇后、行基、菩提僊那、良弁

### 〈普照〉～鑑真招請の苦難～

伝戒師招請の命を受けて、普照と栄叡の2人の僧が唐に渡りましたが、10年目にして高僧鑑真にめぐり会い、来日の受諾を得ました。ところが弟子たちの妨害や悪天候による渡航失敗が重なるうち、栄叡は病に倒れて亡くなり、鑑真も失明してしまいます。そして753年、6度目の渡航も屋久島に流されましたが、ようやく日本にたどり着くことができ、翌年、鑑真は普照とともに平城京に入りました。苦難を乗り越えて来日した鑑真は、東大寺において400人以上の人々に授戒を行い、「大和上」の称号が贈られました。普照は、そうした鑑真和上の活動を支え続けたのでした。

〈登場人物〉 普照、道慈、栄叡、道璿、鑑真、大伴古麻呂

### 〈道鏡〉～鎮護国家の申し子～

道鏡は、孝謙上皇の病氣平癒をきっかけにその寵愛を受けるようになり、藤原仲麻呂の乱後、重祚した称徳天皇の信任を得て、太政大臣禪師そして法王の地位に就き、天皇とともに仏教政策を推進しました。さらに宇佐八幡宮の神託により道鏡が皇位に就こうとする事件が起こりましたが、これは和気清麻呂らによって阻止されました。鎮護国家の申し子のように一世を風靡した道鏡でしたが、称徳天皇が亡くなるとその権力は急激に衰え、最期は「庶人」としてひっそりとその生涯を閉じました。しかし、道鏡によって動き始めた神仏習合の流れは、平安仏教に受け継がれ新たな展開を見せることになるのです。

〈登場人物〉 道鏡、藤原仲麻呂、称徳天皇(孝謙上皇)、和気清麻呂、桓武天皇、最澄

## <仏教の展開> ストーリー詳細

### 行基・良弁の語りによる「テーマ：仏教の展開」についての解説

[行基]

私は行基。飛鳥～奈良時代の僧侶です。6世紀半ばにわが国に伝来した仏教は、飛鳥時代を通じて次第に盛んとなり、天武天皇の時代に「国家を守護する」という役割を担うようになりました。そして奈良時代に入り聖武天皇の時代に、国分寺・国分尼寺の建立、東大寺大仏造立という大事業へと展開していきました。

[良弁]

私は良弁。奈良時代の僧侶です。大仏造立事業に大きく関わった行基大僧正でしたが、その完成を見ること亡くなられました。しかしその思いは受け継がれ、752年に大仏開眼の日を迎え結実したのです。そして私、良弁が東大寺の初代別当に任じられ、鎮護国家の思想を広めていくことになりました。そうした奈良時代の仏教の展開をお話することにいたしましょう。

## 第1章 平城京遷都と仏教

<道慈> ～奈良仏教の殿堂・大安寺～

[行基]

平城京左京六条四坊にある大安寺。飛鳥時代に天武天皇が造営した大官大寺が、平城京遷都に伴って大安寺となりました。唐で仏教を学んだ道慈の尽力によって、大安寺は平城京における仏教興隆の中心となり、国内外から800人を超える僧が集う仏教の殿堂となりました。

### 天武天皇の構想

7世紀後半、天武天皇は仏教興隆をめざして大官大寺の造営を開始し、また皇后の病氣平癒を祈って薬師寺の造営も開始しました。全国に使者を派遣して「金光明経」と「仁王経」を説かせたり、僧尼に天皇や国家のための祈禱を義務づけたりするとともに、僧尼の格付けをする僧綱制も整えました。こうした国家仏教の構想は持統天皇に受け継がれ、694年に遷都した藤原京には、大官大寺と薬師寺という大官寺が並び立ち、全国には500以上の寺が建立されました。

天武天皇の時代の飛鳥京では、蘇我氏の氏寺である法興寺(飛鳥寺)が仏教興隆の中心的役割を果たしていました。道昭や義淵、良弁、玄昉など多くの僧がここで修行していました。私・行基や道慈もその一人です。天武天皇は、その役割を大官大寺に移し、仏教により国家を護ろうと考えたのでした。

[天武天皇]

これまでには天皇家や氏族がそれぞれに仏教を信仰してきたが、朕は仏教を「国を一つにまとめていくもの」として位置づけたいと思う。大官大寺を頂点に、氏族の寺を管理下に置き、全国の寺で同じ経典を読経させるのだ。仏の教えに基づいて国を治めることで、この国はもっと豊かで平和な国になるに違いない。

702年、粟田真人が遣唐使として久しぶりに中国に渡りました。それに随行して道慈が入唐し、長安の西明寺に滞在して修行を始めたのです。

## 登場人物紹介 / 用語解説

### 語り部：行基

【ぎょうき】(668～749)

河内国大鳥郡(現大阪府堺市)出身。漢人系渡来人の子孫と伝えられる高志氏の出身。一説に百済系渡来人(百済王家)の子孫とも言われている。

道昭に師事してその影響を受け、関西地方を中心に貧民救済、治水、架橋などの社会事業を行った。一般民衆への布教が禁止されていた時代に、地方豪族や民衆を中心とした教団を組織したことで政府の弾圧を受けたが、のちに聖武天皇から直接依頼されて大仏造営の勸進を行い、日本最初の大僧正の位を贈られ、「東大寺の四聖(ししよう)」の一人に数えられている。

749年、大仏の完成を見ることなく菅原寺で死去した。

### 語り部：良弁

【ろうべん】(689～774)

相模国出身で義淵に師事。別伝では近江国出身で、鷲にさらわれて奈良二月堂の杉の木に引つかかっているのを義淵に助けられ、僧として育てられたという(良弁杉伝説)。

金鐘寺(現二月堂付近)に住み、聖武天皇の信任を得てここが大和国分寺に指定され、次いで大仏建立により東大寺と呼ばれるようになると、その初代別当に任じられた。

756年に大僧都、773年に僧正の位を贈られ、「東大寺の四聖」の一人に数えられている。

### [大安寺]

〈だいあんじ〉

起源は、聖徳太子が建てた熊凝精舎(くまごりしょうじゃ)であり、これを移転して百済大寺、高市大寺、大官大寺と改称を繰り返し、平城京遷都とともに大安寺となったと伝えられる。

### 道慈

【どうじ】(生年不詳～744)

- 702年に入唐。西明寺で三論宗を修め、皇帝が選んだ学徳優れた高僧100人に選ばれる。
- 718年に帰国し、729年、律師に任ぜられ、仏教政策の推進に大きな役割を果たす。

### 天武天皇

【てんむてんのう】(631?～686 / 在位 673-686)

- 大官大寺の造営や、川原寺での写経事業をはじめ、金光明経の講読を全国に命じるなど仏教を鎮護国家のためのものと位置付けた。
- 伊勢神宮の祭祀を重んじ、神祇の祭祀権を天皇に集中させた。

### [薬師寺]

〈やくしじ〉

天武天皇が皇后の病氣平癒を祈願して藤原京に創建(本薬師寺)。平城京遷都に伴い、西の京の地に移転。南都七大寺の一つに数えられる。

### [法興寺]

〈ほうこうじ〉

飛鳥寺ともいう。蘇我馬子の発願により建立された大寺院。平城遷都に伴い外京に移され元興寺となったが、飛鳥寺も法興寺(本元興寺)として飛鳥の地に残された。

現在は、中金堂にあたる場所に再建された安居院(あんごいん)が「飛鳥寺」と呼ばれている。

### 義淵

【ぎえん】(643～728)

- 天武天皇の皇子とともに岡本宮で養育され、出家して法興寺に入り、龍蓋寺(岡寺)などの5龍寺を創建した。
- 弟子に玄昉・行基・隆尊・良弁などがおり、道慈・道鏡も門下。

### 玄昉

【げんぼう】(生年不詳～746)

- 717年入唐して法相宗を学び、735年に帰国。諸仏像と5000巻余りの経論を持ち帰る。
- 737年に僧正。光明皇后が法華寺に隣接して建立した海龍王寺の初代住持となる。

### [西明寺]

〈さいみょうじ〉

唐の時代、長安にあった仏教寺院。高宗と武則天が病弱であった皇太子の病氣平癒を祈願して656年に創建されたと伝えられる。インドの祇園精舎をモデルにした壮大な寺院。

## 平城京への寺院移転

710年、藤原京から平城京へ遷都が行われました。それに伴い、明日香・藤原京の寺院も移されることになりました。

まず藤原不比等が藤原氏の氏寺を京の東側の外京へ移し興福寺としました。続いて飛鳥寺の禅院が移され、さらに長安の西明寺と観音寺という官立大寺にならって藤原京に造られていた大官大寺、薬師寺の二大官寺も移されることになりました。

[藤原不比等]

平城京には壮麗な宮殿とともに、大伽藍を備えた寺院がなくてはならぬ。なぜなら、仏教は今や東アジア共通の宗教であり、唐の長安にも西明寺や観音寺(青龍寺)などの大寺があると聞いている。平城京にも長安に負けない大寺を造らねばならぬ。まずは我が氏寺を厩坂の地より移し、名も興福寺と改めよう。新京での寺院建立の手本となるよう、立派なものにしないのはう。

大官大寺は官立の第一大寺として左京に移されて大安寺と名を改め、薬師寺は第二大寺として、元明天皇の娘・吉備内親王が母のために建立した東禅院のある右京の地に移されました。

さらに明日香の中心寺院であった飛鳥寺も元正天皇によって外京に移され、先に移転した禅院と合わせて元興寺と呼ばれるようになりました。また、飛鳥寺も仏法興隆の中心寺院でしたので法興寺(本元興寺)として残されました。

718年に道慈が帰国し、長安の西明寺の様子を伝えました。すると朝廷は彼を律師に任命して、大安寺を西明寺のような「仏教の殿堂」にしようと考えたのでした。

## 大安寺の繁栄

奈良時代の仏教の大きな特徴は、それまで主に朝鮮半島から仏教を輸入していた方針を改め、中国から直接取り入れようとしたところにあります。

この頃の中国では国家仏教が全盛期で、国の手厚い庇護のもとでの寺院建立や国家をあげての法要、最新の仏典研究などが行われていました。その進んだ実態を目の当たりにしてきたのが道慈であり、彼と入れ替わりに入唐した玄昉でした。

[道慈]

この目で見た中国は素晴らしいものであった。皇帝は仏教を厚く保護することで国を平和に治めており、長安の西明寺には中国国内だけでなく、インドや東南アジアなどからも徳の高い僧たちがたくさん集まり、多彩で良質な研究が行われている。日本の仏教を発展させるためには大安寺を西明寺と同じような役割を持つ寺にする必要がある。そのために私は密かに西明寺の図面を書き写して持ち帰ったのだ。私は大安寺を奈良仏教の殿堂、いや日本仏教の殿堂と呼ばれるような大寺院に発展させていくぞ。

733年の遣唐使に随って、普照と栄叡が伝戒師の招請という使命を受けて入唐しました。そしてその要請を受けて736年、唐僧の道璿がインド僧・菩提僊那、ベトナム僧・仏哲とともに来日しました。平城京に着いた彼らを、私・行基が出迎えて大安寺に案内し、道慈律師に紹介したのです。

道慈は彼らを歓待して大安寺に住むよう勧め、道璿は禅院を設置して禅宗や天台宗を広め、菩提僊那は華嚴経やインド呪術を、仏哲は密教経典とともに舞や林邑楽などを伝えました。このようにして大安寺には国内外から次々と僧たちが集まってきて、道慈の目指した理想の姿が実現しつつありました。道慈律師は744年に世を去りましたが、747年の「大安寺資材帳」には当時の大安寺に887人の僧が居住していると記されました。まさに「仏教の殿堂」となったのです。

## 登場人物紹介 / 用語解説

### 藤原不比等

【ふじわらのふひと】(659~720)

- 平城京遷都時の政治主導者。他に先駆けて氏寺を藤原京から移転し、興福寺とした。
- 平城宮の東に隣接した居宅は、娘の光明子に伝領され、のちに法華寺となった。

### [興福寺]

〈こうふくじ〉

藤原氏の氏寺。山背国に創建した山階寺(やましなでら)を起源とし、藤原京に移転して厩坂寺(うまさかでら)と改称。平城京遷都とともに、外京に移転し興福寺と名付けられた。

### [観音寺]

〈かんおんじ〉

青龍寺。長安の左街(左京)に位置する大寺。582年創建、当初は靈感寺と呼ばれた。一旦廃寺となり、621年に再建、観音寺と称し、711年に青龍寺と改称。804年に入唐した空海がここで学んだことから、「弘法大師空海ゆかりの寺」として知られる。

### 吉備内親王

【きびないしんのう】(686~729)

- 母の元明天皇のために平城京右京に東禅院(現薬師寺東院堂の前身)を建立。

### 元正天皇

【げんしょうてんのう】(680~748 / 在位 715-724)

- 元正天皇の勅願により、飛鳥寺を平城京に移転し、元興寺とする。
- 飛鳥寺はもともと蘇我氏の氏寺(私寺)であったが、仏教興隆の中心寺院として官寺に準じる扱いを受けた。

### [元興寺]

〈がんこうじ〉

法興寺(飛鳥寺)を前身とする寺院。平城京遷都後も飛鳥に法興寺が存続したので、平城京の方の寺院を一般に「元興寺」と呼び、南都七大寺の一つに数えられる。

### [律師]

〈りっし〉

僧尼を管理するために置かれた僧綱(そうこう)と呼ばれる官職の中で、「僧正」「僧都」に次ぐ第3位に位置づけられた役職。

### [伝戒師]

〈でんかいし〉

仏祖正伝(正しく伝わった仏陀の教え)の大戒を伝授することを伝戒といい、伝戒をしてくれる師を伝戒師と呼ぶ。伝戒と授戒は同義でも用いられるが、「授戒」は僧俗を選ばず行われるもの、「伝戒」は修行者に対してのみ行われるものと区別する宗派もある。

### 道璿

【どうせん】(702~760)

- 中国唐代の僧。736年来日、大安寺に禅院を設置。天台宗にも精通し、最澄は孫弟子にあたる。
- のち吉野の比蘇山寺に入って修禅に精励し、山岳修験者に影響を与えた。

### 菩提僊那

【ぼだいせんな】(704~760)

- 736年来日したインドの婆羅門僧。
- 行基に迎えられて入京し、大安寺に所属して活動した。
- 751年、僧正に任命され、752年の大仏開眼供養会で導師を務める。
- 754年の鑑真来日の際は道璿とともに東大寺で面会。

### 仏哲

【ぶってつ】(生没年不詳)

- 林邑国(ベトナム)出身の僧。菩提僊那に従って736年来日し、大安寺に住んで、林邑楽と菩提・抜頭の舞を日本に伝えた。
- 752年の大仏開眼供養会においても林邑楽を演じた。

天武天皇によって国家仏教として整備が進められている中で、飛鳥時代の道昭や、その弟子である私・行基は、困窮者の救済を中心とする一般民衆への布教を行いました。朝廷においても光明皇后が先頭に立って庶民のための福祉活動を行い、人々から「観音様の化身」と讃えられました。

### 道昭の活動

天武天皇の頃から国家仏教の方向へと発展していき、僧尼は国に仕え、国家安泰のために祈祷するものであると定められて、寺院外での一般民衆への布教は禁止されていました。

しかし、それでは仏教の教えを実践することができないと、民衆の中で活動する僧侶もいました。飛鳥時代の僧で、私の師である道昭もその一人でした。中国で玄奘三蔵に学んだ道昭は、天皇家の信頼も厚い高僧でありながら、全国を巡って民衆のために様々な土木工事を行いました。

[道昭]

私の師であった玄奘三蔵は、「経論の教えは深く、理解し尽くすことは不可能だから、禪を学んで日本の衆生に伝えなさい」とおっしゃいました。その教えの通り、私は全国を周遊し、道の辺に井戸を掘ったり、渡し場に船を設けたり、川に橋を架けたりして、実践によって仏の心を伝えておりました。国に逆らおうなどとは少しも思っておりません。

ですが、そもそも仏の慈悲というものは、国や寺院などといった枠の中に納まるものではないのではないのでしょうか。

### 行基の活動

700年、道昭は亡くなりましたが、私・行基はその遺志を継いで、各地を回って仏の教えを説きながら民衆とともに様々な土木工事を行うようになりました。

平城京の建設が開始されて以来、多くの民衆が工事に駆り出され、働き手を奪われた村は疲弊していました。重い税に耐えかねて逃亡する者や、都に税を運ぶ途上で行き倒れになる者があとを絶ちませんでした。

そこで私は、地方と都を結ぶ街道のあちこちに、旅人に食事や宿を提供する「布施屋」を建て、川に橋を架けたり、村に灌漑施設を作ったりする工事を行いました。

私の活動は一般民衆への布教であるとして度々弾圧を受けましたが、地方を治める郡司や村人たちの強い支持によって、次第に認められるようになっていきました。

[行基の事業に協力した郡司]

行基様はまったく大したお方じゃ。官寺で修行された高僧なのに、貧しい人々のために手を差し伸べてくださる。お蔭でわしが治める村々でも、行基様の指導の下、皆が力を合わせて田をふやし、道を整備して困窮から抜け出すことができた。

お上は民間への布教を禁止しているが、わしらのような立場の者にとって、行基様の活動は大歓迎じゃ。今後もできる限りの協力をさせていただくつもりじゃ。

## 登場人物紹介 / 用語解説

### 光明皇后

【こうみょうこうごう】(701~760)

- 藤原不比等の娘。安宿媛(あすかべひめ)。首皇子(聖武天皇)の妃となり、のちに皇族以外で初の皇后となる。
- 仏教に深く帰依し、悲田院や施薬院の設置、国分寺・国分尼寺の建立、東大寺の創建等を天皇に勧めて実現させる。
- 興福寺に五重塔と西金堂を造営、海龍王寺や法華寺を創建。
- 寺の造営にあわせて多くの仏像も作製され、国中公麻呂や將軍万福らの仏師に活躍の場が提供された。

### 道昭

【どうしょう】(629~700)

- 法相宗の学僧。653年学問僧として遣唐使船で入唐。玄奘三蔵に師事した。
- 經・律・論のいわゆる三蔵を学び、禪を学習して日本に伝える。
- 661年に帰国し、飛鳥の法興時の東南隅に禪院を建て、禪を広める。
- 広く全国を周遊し、井戸を掘り、橋を造るなど社会事業に尽力した。

### 玄奘三蔵

【げんじょうさんざう】(602~664)

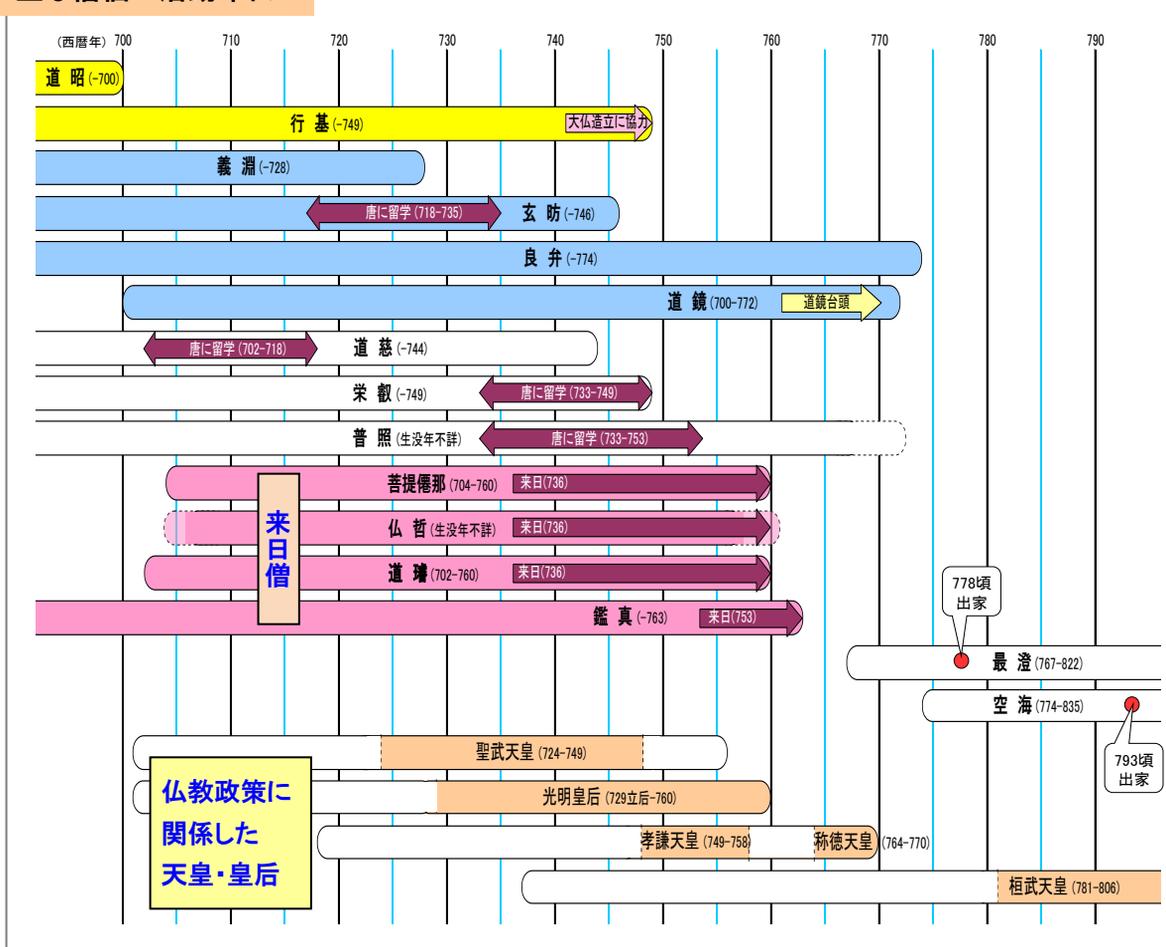
- 中国唐代の僧。インドに旅し、多くの經典を持ち帰る。『西遊記』の三蔵法師のモデルといわれる。
- 經典の中国語翻訳に尽力し、中国仏教の発展に寄与した。

### 【布施屋】

(ふせや)

律令制時代に日本各地に作られた旅行者の一時救護・宿泊施設。食料の配給、けがや病気の手当て、宿泊などのサービスが行われていた。行基が数多く作ったことで知られる。

### 主な僧侶の活動年代



## 光明皇后の活動

そうした中で、朝廷において福祉活動に率先して取り組んだのが、光明皇后でした。

皇太子妃時代の723年、彼女の発案によって興福寺に悲田院と施薬院が設置され、また730年には皇后宮に施薬院、平城京の左京・右京に悲田院が設置されました。さらに745年皇后宮を宮寺とし、法華寺と称して日本の総国分尼寺に位置づけられました。

その法華寺境内に「から風呂」を建てて人々に開放し、皇后は「千人の施浴」のご誓願を立てられたのです。そして誓願が成就しようとする、その千人目は見るに堪えられないほど全身に血膿を持った病人でした。しかし皇后は厭がることなく背中を流し、その病人が膿を吸い出してくれと頼むと、可憐な唇を患部に当てて吸い出してやりました。するとその瞬間、浴室に紫雲がたなびき、病人は黄金の光を放って「われは阿闍(あしゅく)仏なり」との言葉を残し、姿を消したと言うのです。

[光明皇后]

都の華やかさの影で貧しい人々が飢えや病に苦しみ、孤児や病人が行き場を求めて都をさまよっています。役人たちは彼らを都の外に追いやり、僧たちも寺で国の安泰を願う祈禱をしているだけで何の解決にもなっていません。ただ、行基だけはそうした人々を救う活動をしています。仏の教えとは本来、行基のような活動のことではないでしょうか。

そう考えた私は、藤原氏の氏寺である興福寺にまず悲田院と施薬院を建て、次いで都の東西にも悲田院の設置を願ったのです。さらに、もっと人々のためになることをしたいと願い「千人の施浴」を誓願しました。そして私のこうした思いは、御仏の慈悲の心のお導きだと信じています。

## 法華寺の観音様

光明皇后は、仏の教えをよく理解された生き仏のようなお方でした。法華寺のほかにも海龍王寺や新薬師寺を建立し、仏教の発展に寄与されました。彼女のお蔭で私の活動も理解していただけるようになったのです。法華寺のご本尊の十一面観音は、その光明皇后を仏と崇めて作られたと聞いています。光明皇后はその功德により観音様となられ、のちの世まで人々を見守っていかれたのです。

また、のちに孝謙上皇に仕えた和気広虫は、戦乱によって孤児となった83人もの子どもを引き取って養育しました。これも光明皇后の思いを受け継いだ活動だといえるでしょう。

このように奈良時代には、国による社会福祉と、僧尼による民衆救済という両面からの活動が行われ、仏教の教えは次第にその裾野を広げていったのです。

[和気広虫]

恵美押勝の乱で多くの子どもたちが親を失いました。この子たちを見捨てることは、光明皇后様が灯された慈悲の明かりを消すことになるでしょう。孝謙上皇様とともに出家し、仏に仕える身となった私が子どもたちを引き取って育てていくことが、皇后様の思いを受け継ぐことになると思ったのです。

## 登場人物紹介 / 用語解説

### 【悲田院】

〈ひでんいん〉

仏教の慈悲の思想に基づき、貧しい人や孤児を救うために作られた施設。  
723年、光明子の発案により興福寺に設置したものが、日本では記録上最古のものである。

### 【施薬院】

〈せやくいん〉

奈良時代に設置された庶民救済施設および薬園。「施」の字は読まれず「やくいん」と呼ばれることが多い。病人や孤児の保護、治療、施薬を行った。

### 【法華寺】

〈ほっけじ〉

藤原不比等の邸宅を光明皇后が相続して皇后宮とし、745年に宮寺としたのが起源。のちに法華寺と改称され、総国分尼寺に位置づけられた。

### 【から風呂】

〈からぶろ〉

蒸気による蒸し風呂(サウナ)形式の浴室。法華寺の場合は、丸釜で湯を沸かして蒸気を発生させ、スノコの間から蒸気が浴室に上がってくる仕組み。熱い蒸気が直接あたって火傷しないように、尻の下に敷いた布が「風呂敷」の語源。

### 【阿闍仏】

〈あしやくぶつ〉

阿闍如来。梵名は「アクショービヤ」。密教における金剛界五仏の一つ。アクショービヤとは「揺るぎない」という意味で、この如来の悟りの境地が金剛(ダイヤモンド)のように堅固であることを示す。

### 【海龍王寺】

〈かいりゅうおうじ〉

光明皇后の皇后宮の北東隅に建てられたことから「隅寺(すみでら)」の別称がある。731年に光明皇后が建立し、玄昉が初代住持となったと伝えられる。玄昉が唐から帰国する途上で暴風雨に遭い、「海龍王経」を唱えて救われたという伝承があり、海龍王寺の寺号はそれに因んだものとも思われる。

### 【新薬師寺】

〈しんやくしじ〉

747年に光明皇后が聖武天皇の病氣平癒を祈願して建立。また別の伝承に、745年に聖武天皇が光明皇后の眼病平癒を祈願して建立したとある。創建当初は、金堂・講堂・東西両塔など七堂伽藍が建ち並ぶ大寺院であった。

### 和気広虫

【わけのひろむし】(730~799)

- 和気清麻呂の姉。夫と死別したのち、孝謙上皇に仕える。
- 756年、それまで養育していた京中の孤児のうち成人した男9人、女1人を養子とした。
- 762年、孝謙上皇とともに出家し「法均尼」と呼ばれた。
- 764年、恵美押勝の乱によって続出した孤児のうち、83人の子どもを救い養子とした。

### 恵美押勝

【えみのおしかつ】(706~764)

- 藤原仲麻呂。758年、淳仁天皇のもとで唐風政策を推進し、「恵美押勝」と名を改める。
- 道鏡の台頭により孝謙上皇と対立し、764年、一挙に挽回するため反乱を企てるが、事前に発覚し敗れる。

平城京では天災、疫病、反乱が相次ぎました。聖武天皇は悩んだ末、仏教に活路を求め、すべての人の心の拠り所となるような巨大な盧舎那仏を造ろうと決意します。しかもそれを民衆一人一人の力を合わせて成し遂げたいと願い、私・行基に協力を要請されました。私はそれを快諾して大々的な勧進を行い、752年4月、ついに大仏開眼の日を迎えました。

こうして大仏造立を発願された聖武天皇は、勧進を行った行基、開眼の導師を務めた菩提僊那、東大寺の初代別当となった良弁とともに、「東大寺の四聖(ししゅう)」と呼ばれるようになったのです。

### 社会不安の増大

平城京は「咲く花の匂うがごとく」と謳われるほど繁栄しましたが、その一方で地震、飢饉などの天変地異も相次ぎました。特に735年と737年に発生した天然痘は、全人口の4分の1以上が死亡するという大惨事になりました。さらに、九州で起きた藤原広嗣の乱が追い打ちをかけます。社会不安が募り、国を治める聖武天皇の悩みは深まるばかりでした。

[光明皇后]

凶作による飢饉が続き、疫病がはやり、さらには広嗣の乱まで起こりました。夫の聖武天皇は、「このような災難が続くのは、朕に天子としての徳がないからであろう。朕は天皇として何を為せばよいのだろうか。」と心を痛めておられました。そして私が「仏の慈悲の心」をお話すると、天皇も仏教が人々に精神的な支えを与え、国家を平穩にするものであると考えられたようです。

### 鎮護国家への動き

聖武天皇は741年2月に国分寺・国分尼寺建立の詔を出し、天武天皇が目指された「仏教による鎮護国家建設」の集大成として全国に官寺を築き、そしてその中心となる都には巨大な仏像を造ろうと思われたのです。

そこで3月、聖武天皇は恭仁京郊外の泉橋院に私・行基を訪ねて来られました。「大仏を造るための資金や資材集めに協力してほしい。国家権力で大仏を造るのはたやすいが、私は皆の力で大仏を造りたいと思っている。そのために多くの民に慕われているそなたの力が必要なのだ」と、天皇は熱く語られました。

[聖武天皇]

河内の国の智識寺というところに行幸した折りに、人々が智識と呼ばれる仏縁を結び、力を合わせて寺と仏を造ったという話を聞いた。朕はその話に大きな感動を覚えた。一人一人の力は小さいが、その力を合わせれば、一見不可能と思われることでも可能にできると知ったからだ。このたびの大仏造立も、大仏を造ること自体が目的ではない。大切なのは皆が心をつにして、力を合わせるということなのだ。それをやり遂げることができたなら、この国は平和な世界を取り戻せるであろう。行基よ、民衆とともに寺を建て、橋を架けてきたそなたなら、朕の思いがわかるであろう。どうか朕に力を貸してほしい。

聖武天皇の思いに打たれた私は、協力をお約束しました。私の呼びかけに対し、多くの人々が喜んで力を貸してくれました。財のある者は金を、ない者は労働力を提供して、他に類を見ない巨大な大仏は形づくられていったのです。それはまさに国と民衆が力を合わせた、平和への祈りと言えるものでした。

## 登場人物紹介 / 用語解説

### 聖武天皇

【しょうむてんのう】(701~756 / 在位 724-749)

- 仏教を厚く信仰し、光明皇后とともに国家鎮護の仏教政策を遂行。
- 741年に国分寺・国分尼寺建立の詔、743年に大仏造立の詔を発す。
- 紆余曲折を経て、752年、東大寺に大仏が完成し、開眼供養会を開催。

### 藤原広嗣

【ふじわらのひろつぐ】(生年不詳~740)

- 藤原宇合の長男。
- 天然痘の流行により藤原四子政権が崩壊したのち、藤原勢力の再建を目指したが、橘諸兄らと対立する。
- 740年に勢力挽回を期して大宰府で挙兵するが失敗に終わる(藤原広嗣の乱)。

### 【泉橋院】

〈せんきょういん〉

現京都府木津川市山城町にある「泉橋寺」の前身。行基創建49院の一つ。740年創建と伝えられる。

### 【智識寺】

〈ちしきじ〉

河内国大県郡(現大阪府柏原市の石神社付近)にあった寺院。聖武天皇が人々の力で造られた盧舎那仏と対面、大仏造立のきっかけとなった。室町時代頃には廃れ、東塔の礎石が石神社(いわじんじや)の境内に残っている。

## 【コラム】 頭塔と玄昉

奈良市高畑町に「頭塔(ずとう)」と呼ばれる史跡がある。7段の階段ピラミッド状の土製の塔だが、これには、「僧玄昉の首塚である」という伝承も残っている。

746年6月、僧玄昉が筑紫国(福岡県)で没した。『続日本紀』には、「世に相伝えて云わく、藤原広嗣が霊の為に害(そこな)われぬ」と伝えられている。

玄昉は、唐留学中に玄宗皇帝からその能力を認められ、三品に准ずる地位と紫の袈裟を与えられた。諸仏像と経論5000巻などを携えて帰国すると、朝廷から「僧正」に任じられ、内道場(宮中に置かれた仏堂)における仏事を主宰した。また聖武天皇の生母である藤原宮子の病を秘法によって快癒させ、36年ぶりの母子対面を実現した。こうした功績により、吉備真備とともに橘諸兄政権のブレーンとなって、仏教政策を推進した。一方、藤原四子の後継者と目されていた広嗣は、玄昉や真備の登用が悪政の根源であると批判して橘諸兄と対立し、大宰府に左遷されてしまう。

特に玄昉については、その栄達は僧としての行いに反すとの批判や、玄昉が宮子や光明皇后と密通しているとの噂もあり、740年、藤原広嗣は玄昉と真備の排除を主張して大宰府で反乱を起こす。反乱はまもなく鎮圧され広嗣は斬殺されたが、彼は怨霊となって朝廷に齒向かった。「広嗣の首が空に昇り、赤鏡となって、見た者はことごとく死んだ」という伝承も残っている。

そして745年、玄昉が大宰府の筑紫観世音寺造寺司として左遷されたが、これは広嗣の怨霊が引き寄せたものとも言われている。翌年、観世音寺の落慶供養の当日、玄昉が供養の講師を務めていると、高座に雷が落ち、雲中から手が伸びてきて玄昉の首を持ち去った。のちに奈良の興福寺境内に首が落ちてきて、落下と同時に二、三百人ほどの者がどっと笑う声が虚空に響き、そのドクロには「玄昉」の銘があったという。高畑町の「頭塔」は、その首を葬ったところだと伝えられている。

朝廷は吉備真備を大宰府に派遣、真備は陰陽(おんみょう)の術で霊を調伏し、広嗣を鏡明神(かがみみょうじん)として、彼の処刑の地に祀るとその霊はようやく鎮まった。佐賀県唐津市の鏡神社内の二の宮がそれである。また奈良市の「頭塔」から東へ少し行ったところに、広嗣を祭神とする南都鏡神社があるが、これは平安初期に新薬師寺の鎮守として唐津の鏡神社から勧請を受けて創建されたと伝えられている。

## 大仏造立の詔

743年、聖武天皇は紫香樂宮において大仏造立の詔を出しました。そして翌年、紫香樂宮近くの甲賀寺に大仏の骨柱が立てられました。ところがその頃、紫香樂宮周辺で山火事が続発するなど不穏な出来事があったため、大仏造立計画は一旦中止されました。

745年に平城京に復都すると、大和国分寺の金鐘寺において大仏造立が再開されることになり、私は聖武天皇から大僧正に任命されたのです。金鐘寺は「東大寺」と名を改められ、国中公麻呂、高市大國(たけちのおおくに)、高市真麻呂(さねまろ)らの職人によって大仏の鑄造が開始されました。鑄造に必要な銅や錫は中国・四国地方、仕上げに必要な金は東北地方から集められ、大仏殿建設の資材も全国各地から調達されました。また、聖武天皇ご自身も工事現場で土を運ばれたのです。そのようにして造られた大仏様は、749年末にその雄大な姿を現すことになるのです。

[聖武天皇]

行基は、朕の思いをよく理解し、大仏造営の勸進に奔走してくれた。紫香樂における造立はやむを得ず中止したが、大仏造立計画自体を中止するわけにはいかぬ。そこで金鐘寺を「東大寺」と改めて総国分寺とし、ここに大仏を造立することにしたのじゃ。また行基にはこれまでの働きに感謝して「大僧正」の称号を贈ることにした。

大仏様の有り難く輝く姿を拝める日も間近となった。行基にもその姿を見せてやりたかったのう。

## 大仏開眼

[良弁]

ここからは私・良弁がお話ししましょう。

行基殿は749年2月、大仏の完成を見ることなく菅原寺で亡くなられました。しかし聖武天皇と行基殿の思いは多くの人々に受け継がれ、延べ260万人が参加した大仏造立事業は752年に完成し、開眼供養会の当日を迎えました。

聖武天皇は749年7月、病弱を理由に娘の孝謙天皇に譲位し、沙弥勝満と号して光明皇太后とともに仏道に専心されました。そして、「仏教伝来」(552年)から200年目の節目にあたる752年の仏誕の日(4月8日)に合わせて大仏開眼供養会が開かれることになりました。

大安寺に滞在中のインド僧・菩提僊那が導師を務め、聖武上皇、光明皇太后、孝謙天皇を始め、国内外から約1万人の僧が参列して、大仏開眼の儀式は厳かに挙行されました。

[菩提僊那]

色とりどりの花に埋め尽くされた大仏殿に鐘の音が響き、厳かな読経が続く中、いよいよ大仏開眼の瞬間がやってきました。開眼師の私が持つ大筆には、五色の長い縷が結ばれ、その縷は天皇をはじめとする参列の人々にしっかりと握られて、その場にいる全員が開眼に手を添える形がとられました。

その昔、はるかインドから中国、朝鮮を経てこの国に仏教が伝わり、そして今、インド僧である私が、この縷を通して皆さんの祈りを仏に届ける。仏教が結ぶ縁の素晴らしさを、この時ほど感じたことはありません。

大仏殿前に設けられた舞台には、美しく着飾った楽人や舞人が入れ替わり現れて、日本、韓国、中国、カンボジアなどの舞楽を次々に披露し、華やぎを添えました。壮大で国際色豊かなこの式典は、「仏教が伝来して以来、これほど盛大な儀式はなかった」と、後世まで語り伝えられました。

以後、大仏は鎮護国家の象徴となり、東大寺は国家仏教の中心的な役割を担うことになりました。

## 登場人物紹介 / 用語解説

### 【紫香楽宮】

〈しがらきのみや〉

聖武天皇が遷都を繰り返す中で造営された離宮。現在の滋賀県信楽町付近。

### 【金鐘寺】

〈こんしゆじ〉

東大寺の前身寺院。金鍾山寺(きんしやうさんじ)ともいう。現在の法華堂(三月堂)あたりにあったと考えられている。幼くして亡くなった聖武天皇と光明皇后の皇子(基王)の菩提を弔うために建てられた山房が起源とされる。

### 【東大寺】

〈とうだいじ〉

金光明(こんこうみょう)四天王護国之寺、金光明寺(きんこうみょうじ)ともいう。聖武天皇が国力を尽くして建立した大寺院で、総国分寺に位置づけられる。「奈良の大仏」として知られる盧舎那仏を本尊とし、初代別当は良弁。

### 國中公麻呂

【くになかのきみまる】(生年不詳～774)

- 天智朝に帰化した百済の技術者、国骨富(くにのこつふ)の孫。
- 746年、造仏長官に任ぜられ、東大寺大仏の鑄造と大仏殿建立の指揮をとる。

### 【菅原寺】

〈すがわらでら〉

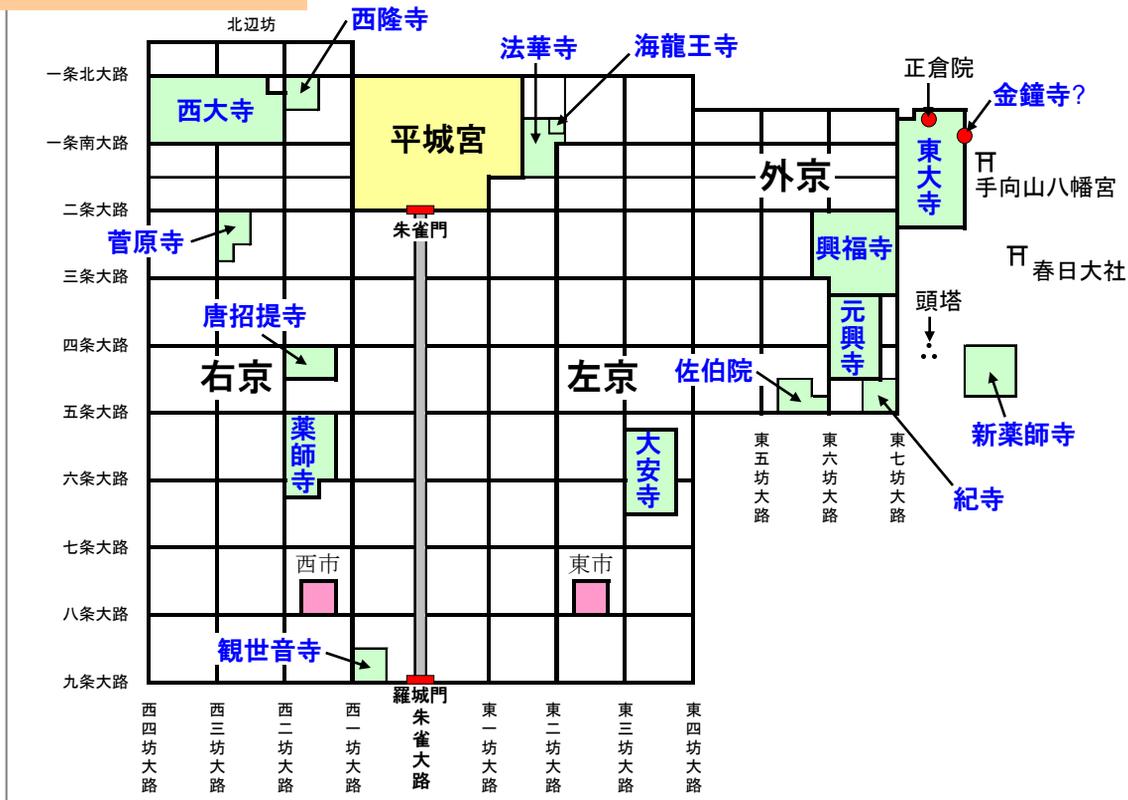
喜光寺(きこうじ)の前身寺院。寺史乙丸という人物が自宅を行基に寄進して寺としたものが起源。行基創建49院の一つ。行基がその生涯を閉じた場所としても知られる。菅原道真生誕地と伝わる菅原の地にあることから菅原寺と呼ばれた。

### 【縷】

〈る〉

細い糸。細いけれども途切れずに長く連なる糸筋を意味して「縷」という表現が使われている。「開眼縷」は約200m。

### 奈良時代の主な寺院



天平勝宝6年(754)、苦難を乗り越えて鑑真和上が来日されました。伝戒師招請のために中国に派遣された普照と栄叡という2人の僧の、10年の歳月を費やした命がけの働きによって、高僧鑑真を招くことができたのでした。これによってわが国は、正式な僧侶を養成することが可能になり、仏教界に秩序がもたらされたのです。

### 私度僧の増加

仏教を国家の根幹に据えるには、一つ大きな問題がありました。それは、当時の日本には僧侶となるための「授戒」の儀式を行える高僧がおらず、正式な僧侶を養成することができないということでした。

天皇家の病氣平癒祈願や仏教行事のたびに僧を大量に得度させたり、税を逃れるために勝手に出家する私度僧が増えたりしたことによって、正式な資格を持たない僧侶があふれていました。

国際社会でも通用するような正しい仏法を広めるためには、早々にこの問題を解決する必要がありました。

[道慈]

私は702年の遣唐使船で唐に渡り、唐の仏教の実態をつぶさに見た。正式な僧侶になるには、得度したのちに三師七証と呼ばれる十人の高僧のもとで、受戒という儀式を行わなくてはならない。ところが日本には戒を授けることのできる「伝戒師」の資格を持つ僧がおらぬ。

一刻も早く伝戒師を招かなくては、力量不足な僧ばかりが世にあふれ、社会秩序が乱れてしまう。外国からも、日本は正式な仏教国とは認められないことになってしまうぞ。

### 高僧の招聘

718年に帰国した道慈は律師に任じられ、大安寺を仏教の殿堂とするために、その伽藍整備に尽力していましたが、当時のこのような状況を危惧し、伝戒師の招聘を朝廷に進言しました。

大安寺で学んでいた興福寺の僧・普照は道慈の思いを受けて、伝戒師となるべき高僧を日本に招くため、733年、同僚の栄叡とともに唐に派遣されました。

普照と栄叡は、洛陽の大福先寺で具足戒を授けられ、唐僧・道璿に来日を促しました。道璿は彼らの招聘に応じ、菩提僊那、仏哲とともに736年来日し、大安寺に招かれました。

そして普照らは唐に滞在すること10年目になる742年、揚州の大明寺に鑑真を訪ねました。鑑真は4万人以上の人々に授戒を行った、中国でも有名な高僧でした。

[栄叡]

日本を出てはや10年、我々はいよいよ大明寺にたどり着き、鑑真和上に巡り会えた。わが国は、未だ御仏の教えを正しく実践する術を持たず、仏教界は授戒のできる優秀な僧を、我らが連れ帰る日を待ちわびている。和上ご本人に来ていただくことは到底無理だとしても、和上のお弟子の方々に、何としても日本行きを承諾していただきたい。

## 登場人物紹介 / 用語解説

### 鑑真

【がんじん】(688～763)

- 栄叡、普照の授戒師招請に応え、753年来日した唐の高僧。
- 聖武上皇、光明皇太后、孝謙天皇ら400人以上に菩薩戒を授ける。
- 755年、東大寺に戒壇院を開設。759年、唐招提寺を創建。
- 晩年は、悲田院を作って貧民救済に尽力した。

### 普照

【ふしょう】(生没年不詳)

- 興福寺の僧。733年に栄叡とともに伝戒師を招請するために入唐。
- 753年、苦難の末、鑑真来日を成功させた。
- 仏法の伝授に努めたほか、平城京外の路傍に果樹を植えて旅人の便をはかるよう上奏したことが知られる。

### 栄叡

【ようえい】(生年不詳～749)

- 興福寺の僧。733年に普照とともに入唐。洛陽で道璿に会い、来日を要請。
- その後大明寺の鑑真を訪ね、日本への渡航を懇願し、承諾を得た。
- 4度目の渡航に失敗したのち病にかかり、唐で亡くなる。

### [授戒／伝戒師]

〈じゅかい／でんかいし〉

仏の戒法を授受する中で、授ける側からは授戒といい、受ける側からは受戒という。授戒の儀式を行うことのできる高僧のことを授戒師といい、在家信者に対しては菩薩戒を授けることで仏弟子として認め、出家者に対しては伝戒師(戒和上)として授戒の儀式を行い、正式な僧尼として認めた。

### [三師七証]

〈さんしちししょう〉

三師とは、戒律を授ける直接の責任者である戒和上(わじょう)、戒場で授戒の作法の文を読む羯磨(こんま)師、威儀作法を教える教授師の3人のこと。七証とは、授戒の儀式に立ち会い、受戒を証明する7人の僧のこと。

### [大福先寺]

〈だいふくせんじ〉

長安の東方の洛陽にある寺院。伝戒師を招請するために入唐した普照と栄叡が最初に逗留した寺院。明代に洪水によって水没したため、現在の寺院は北側の地に再建されたもの。

### [具足戒]

〈ぐそくかい〉

小乗仏教の僧尼の戒。または出家集団に入るための条件となるもの。本来「完全な戒」の意味。比丘(男性)は250戒、比丘尼(女性)は348戒を護持すべきとされる。この戒法を護持したときには、無量の戒徳を修行者の身体に円満具足する(欠けるところなく具える)ことを意味する。

### [大明寺]

〈だいめいじ〉

5世紀半ば、南北朝時代の南朝の宋の年号である大明年間に創建された寺院。中国江蘇省揚州市にあり、鑑真が住職をつとめていた寺院として知られる。

## 鑑真の来日

普照と栄叡から事情を聞いた鑑真は、弟子たちに「日本に渡ろうと思う者はいないか」と問いかけましたが、命の危険を冒してまで渡日を希望する者はありませんでした。

すると鑑真は、「誰も行かないのなら私が行こう」と言いだし、それに驚いた弟子たちは一転して随行を申し出ました。しかし鑑真の渡日を阻止しようとする者の妨害や航海中の悪天候に妨げられて、鑑真の渡日は容易に実現しませんでした。

5度目の渡航に失敗し、揚州に戻る途中で苦労を共にしてきた栄叡が病に倒れて亡くなると、普照は人目をはばからず号泣し、鑑真も動揺して一時は天竺に向かおうする場面もありました。やがて鑑真は揚州に戻り、普照は別れて明州の阿育王寺に入りました。

そして753年、遣唐使としてやってきた藤原清河らは、玄宗皇帝の許可が得られなかったにもかかわらず、鑑真に直接面会して来日を要請します。しかし土壇場になっておじけづいた清河は、鑑真の乗船を拒否してしまいます。ところが副使の同伴古麻呂が密かに鑑真を第2船に乗せ、普照も合流して第3船に乗り込みました。鑑真に再会した普照は大いに喜びましたが、長旅の疲労により鑑真は失明していました。2人の乗り込んだ船は悪天候で屋久島に流されましたが、何とか無事に日本にたどり着くことができたのです。

[普照]

鑑真和上の乗船が許可されず、もうあきらめておりました。ところが和上はこうして来日され、暗闇の中に光明が差し込んだような喜びです。唐に渡って10年、この招請計画の参加者のうち36人が亡くなり、その中には友の栄叡も含まれています。しかし、体は異国の土となろうと、栄叡の魂は私と共に戻ってきているはず。鑑真和上は失明されましたが、これからは私が和上の眼となり、栄叡の分まで伝戒師としての活動を支えていこうと思います。

## 唐招提寺の建立

754年、平城京に到着した鑑真は、聖武上皇、孝謙天皇らの歓待をうけ、東大寺大仏殿に戒壇が築かれて、上皇をはじめとする400人以上に菩薩戒が授けられました。その後、普照とともに東大寺に住むことになり、常設の東大寺戒壇院が建立されました。また、大宰府観世音寺および下野薬師寺にも戒壇が設置され、「天下の三戒壇」と呼ばれました。鑑真のお蔭で、わが国の戒律制度は急速に整備されていきました。

758年、鑑真に「大和上」の称号が贈られ、今後は制度整備のためでなく、自由に戒律を伝えられる配慮がなされました。そして759年、新田部親王の邸宅跡が鑑真に与えられ、唐招提寺が建立されました。鑑真は唐招提寺において戒律のほか、彫刻や薬草の知識も伝え、また悲田院を作って貧民救済にも取り組まれました。

普照もこの頃、旅人の飢えを癒すために京外の街道に果樹を植えることを奏上し、社会福祉にも貢献しました。

[鑑真]

私は日本にやってきて、これまでに数えきれぬくらいの僧尼たちに戒律を授けてきた。そして日本にも徳の高い僧侶がたくさん育ってきている。苦勞して日本に渡ってきた甲斐があったというものだ。あの日、普照と栄叡に出会わなければ、今私はここにこうしていなかった。日本を正しい仏法に守られた国にしたいという彼らの情熱が、私をこの国に招き寄せたのだ。70歳を超えて、私の役割も終えようとしている。これからは、貧しい人々の救済にも心を砕いていきたいと思うのじゃ。

## 登場人物紹介 / 用語解説

### 【阿育王寺】

〈あいくおうじ〉

現在の中国浙江省寧波市にある寺院。起源は281年に遡り、405年に塔、禅室が造られ、522年に梁武帝より阿育王寺の額を賜ったという。

### 【菩薩戒】

〈ぼさつかい〉

大乘仏教において、菩薩が受持する戒のこと。大乘戒・大戒とも呼ばれる。菩薩とは、修行者の理想像であり、六波羅蜜(『般若経』など実践すべき6つの徳目)の実践を通じて一切衆生の成仏を願うものを指す。

### 【大宰府観世音寺】

〈だざいふかんぜおんじ〉

福岡県太宰府市にある天台宗寺院。7世紀後半、天智天皇が母・斉明天皇の追善のために発願し、約80年後の746年に造営が完了。落慶法要の当日、講師を務めていた玄昉が落雷によって命を落としたとの伝承がある。

### 【下野薬師寺】

〈しもつけやくしじ〉

現栃木県下野市にかつてあった寺院。7世紀末頃の創建と伝えられる。奈良時代の末に道鏡がここに左遷された。戦国時代に戦渦に巻き込まれて焼失した。

### 新田部親王

【にいたべしんのう】(生年不詳～735)

- 天武天皇の子。母は藤原五百重娘(藤原鎌足の娘)。
- 新田部親王の邸宅のあった地が、その後鑑真に与えられ唐招提寺となった。

### 【唐招提寺】

〈とうしょうだいじ〉

759年、鑑真和上が新田部親王の旧宅に戒律を学ぶ人たちのための修業の道場を開いたことに始まる。南都六宗の一つである律宗の総本山。唐招提寺の寺号は「唐僧鑑真和上のための寺」という意味。

### 「鑑真の来日」関係地図



近江国の保良離宮で病に伏せた孝謙上皇を治療したことから、僧道鏡が上皇に近侍するようになりました。そうした関係を淳仁天皇が諫めると、上皇はこれに激怒、法華寺に移って出家し、淳仁天皇の権限を縮小して自分が政治を行うことを宣言したのです。上皇は、道鏡を重用して鎮護国家思想に基づく仏教政治を推進し、律令を重視する藤原仲麻呂と対立するようになったのです。

### 道鏡の重用

鑑真和上から菩薩戒を授けられた孝謙天皇は、父・聖武上皇、母・光明皇太后とともに深く仏教に帰依していました。孝謙天皇は、大仏造立事業を積極的に推進しその成功に導いた藤原仲麻呂を信頼し、彼の進言に従って淳仁天皇に譲位しました。ところが、仲麻呂は養老律令に基づく唐風政治を推し進め、孝謙上皇が道鏡を近侍させると、淳仁天皇を通じてそれを批判したのです。

760年に光明皇太后も亡くなられており、太政大臣となった藤原仲麻呂は、仏教に基づく鎮護国家よりも、法に基づく律令国家を重視しました。孝謙上皇はそうした仲麻呂の政治方針も不満だったのでしょう。上皇は出家するとともに「帝は常の祀りと小事を行え。国家の大事と賞罰は朕が行う」と宣言し、道鏡を重用して鎮護国家への復帰を目指しました。

これに反対した藤原仲麻呂の反乱を鎮めると、上皇は再び皇位に就いて称徳天皇となり、道鏡を太政大臣禅師、次いで法王の位につけて仏教政治を推進したのです。

#### [道鏡]

私は義淵僧正に師事し、先輩の良弁殿からは梵語を教えていただいた。道慈、玄昉、行基といった方々が仏教興隆に尽力され、また唐からお招きした鑑真和上のご努力により戒律制度も確立しました。ところが仲麻呂は、仏教の教えよりも律令を重視したのです。仏教をおろそかにすれば、また以前のように災難がふりかかるであろう。称徳天皇をお助けして、鎮護国家を維持していかなばならぬ。

称徳天皇は、西大寺、西隆寺の造営や百万塔の作製などの仏教事業を次々に行いました。国分寺、国分尼寺の制度が確立したのもこの頃です。

### 神仏習合の動き

奈良時代を通して、仏教による鎮護国家作りが進められると、古くからの日本の神々の役割をどう位置づけるかが問題になっていました。そうした中で有力な神々が仏教に帰依する、あるいは仏教を護持するという神仏習合の考え方が生まれてきました。大仏造立に際して宇佐八幡宮が全面協力し、749年、東大寺の守護神として八幡宮が分社されて手向山八幡宮が建立されました。

道鏡は加持祈祷という神に通ずる能力にも優れており、764年の藤原仲麻呂の乱の鎮圧も仏教だけでなく神霊の護りに依るところも大きいと考えられました。道鏡を寵愛する称徳天皇の即位により、仏と神との混交はますます加速することになりました。

仏とともに神も律令国家の守護者にするという政策のもと、神社の境内には神のための神宮寺が建てられ、「正一位」などといった位階(神階)も授けられました。

#### [称徳天皇]

神の子孫である朕が、法王である道鏡と手を組み、仏教がめざす平和な世界を神の力で守護する。理想的ではないか。仏を守ることによって、神も鎮護国家の役割を担うことになるのじゃ。その意をこめて、朕は年号を「天平神護」と改めたのじゃ。

## 登場人物紹介 / 用語解説

### 道鏡

【どうきょう】(生年不詳～772)

- 義淵の弟子と伝えられ、東大寺の僧として良弁に仕える。
- 孝謙上皇の寵愛を受けて出世し、重祚後の称徳天皇の仏教政策を支える。
- 東大寺に対抗して西大寺(僧寺)、西隆寺(尼寺)の建立を提言した。

### 淳仁天皇

【じゆんにんてんのう】(733～765 / 在位 758-764)

- 孝謙天皇の譲位によって即位したが、実権は藤原仲麻呂が握っていた。

### 藤原仲麻呂

【ふじわらのなかまる】(706～764)

- 藤原武智麻呂の次男。のちに「恵美押勝」と称する。
- 叔母にあたる光明皇后を支え、大仏造立を中心とする鎮護国家樹立に尽力する。
- 淳仁天皇の時代には、唐制の徹底した模倣(唐風政策)によって律令体制の完成を図ろうとした。

### 称徳天皇

【しょうとくてんのう】(718～770 / 在位 764-770)

- 孝謙天皇。淳仁天皇に譲位後、上皇。
- 道鏡を寵愛するようになって、淳仁天皇や恵美押勝と対立。
- 恵美押勝の乱後、重祚して称徳天皇となり、道鏡を重用して仏教政策を展開。

### 【西大寺】

〈さいだいじ〉

称徳天皇の発願により765年に創建。常騰(じょうとう)を初代住職とする。南都七大寺の一つとして壮麗な伽藍を誇った。

### 【西隆寺】

〈さいりゅうじ〉

称徳天皇の発願により西大寺の尼寺として767年に創建。官寺として他の諸大寺と同様の扱いを受けていたが、次第に衰退し、鎌倉時代には廃寺となった。

### 【宇佐八幡宮】

〈うさはちまんぐう〉

大分県宇佐市にある神社で、全国44,000社と言われる八幡宮の総本山。正式名は宇佐神宮。伊勢神宮の天照皇大神に次ぐ皇室の祖先神に位置づけられていた。

### 【手向山八幡宮】

〈たむけやまはちまんぐう〉

聖武天皇が大仏を造営する際に、宇佐八幡神から分社し、東大寺の守護神として勧請された神社。創建以来東大寺に属し、その鎮守社とされてきたが、明治の神仏分離の際に東大寺から独立した。

## 宇佐八幡宮の神託

769年、道鏡の弟で大宰府長官の弓削浄人と大宰府で神祇を担当する習宜阿曾麻呂が、「道鏡を皇位に就ければ天下は太平になる」という宇佐八幡宮の神託があったことを称徳天皇に伝えました。

道鏡を寵愛し、できれば皇位も譲りたいと考えていた称徳天皇は、この知らせに喜び、確認のために側近の法均尼(和気広虫)の弟・和気清麻呂を派遣しましたが、彼の報告は天皇の期待に反し、「皇位には必ず天皇家の血を引く者を立てよ」というものでした。

翌年、称徳天皇が亡くなると、道鏡は下野薬師寺に左遷されました。鎮護国家の申し子として一世を風靡した道鏡も、最期は「庶人」として扱われ、都から遠く離れた東国でひっそりとその生涯を閉じたのです。

皇位は天智天皇の孫にあたる光仁天皇に継承されました。政治の主導権は藤原永手、良継、百川らに握られるようになり、桓武天皇が擁立されると、仏教と政治の分離が図られていきます。

[桓武天皇]

仏教を大切にすることは良いことだ。しかし、鎮護国家とは仏教によって守護される国家のことであり、律令国家を護持するための補助的な思想でなくてはならぬ。仏教が国家を統治しようとした動きは明らかに行きすぎた。政治と仏教の役割を区別しなくてはならないが、平城京には仏教勢力が根を張っており、改革を進めるのが難しい。そこで朕は、拠点新たな地へと移すことにしたのじゃ。

## 平安仏教へ

桓武天皇は784年に長岡京へ、さらに794年に平安京へと遷都しましたが、平城京遷都の時のような寺院の移転は行われませんでした。しかし、長岡京造営に際して再び政争が起こったこともあり、鎮護国家の思想は引き継がれていきます。

神仏習合と関わりの深い新たな仏教思想として、最澄や空海に期待をかけるようになり、奈良仏教とは趣の違う平安仏教が生まれようとしていました。

[最澄]

天皇家と国家の安泰を祈り、ひたすら経典を研究する奈良仏教のあり方には疑問を感じている。身分の貴賤に関わりなく、誰もが悟れるように導くのが仏教本来の役割ではないだろうか。みんなが悟ることができ、安らぎの境地に至れるような仏教を、私は探し求めたいと思う。

## 登場人物紹介 / 用語解説

### 弓削浄人

【ゆげのきよひと】(生没年不詳)

- 弓削道鏡の弟、道鏡政権のもとで急速に昇進し、768年に大納言。翌年、大宰帥となる。
- 道鏡失脚後は、土佐に流罪となる。

### 習宜阿曾麻呂

【すげのあそまる】(生没年不詳)

- 769年、大宰主神(ださいのかんつかさ)の時、宇佐八幡宮の神託を奏上。道鏡失脚後、種子島に流罪。

### 和気清麻呂

【わけのきよまる】(733~799)

- 姉の和気広虫とともに称徳天皇に仕え、769年皇位に就こうとした道鏡の計画に対し、使者として宇佐八幡宮の神託を告げ、道鏡の野心を退けた。
- 称徳天皇によって大隅国に配流されるが、その後召還され、桓武天皇に仕え、あつい信頼を得た。

### 光仁天皇

【こうにんてんのう】(709~781 / 在位 770-781)

- 藤原永手らに擁立され、62歳で即位。道鏡を追放するとともに仏教偏重の諸制度を改めた。

### 藤原永手

【ふじわらのながて】(714~771)

- 藤原房前の次男。
- 称徳朝で左大臣に昇進し、右大臣の吉備真備とともに政治を主導。
- 称徳天皇の没後、白壁王(光仁天皇)を皇太子に擁立し、光仁天皇として即位させる。

### 藤原良継

【ふじわらのよしつぐ】(716~777)

- 藤原宇合の次男。光仁天皇の擁立に尽力し、藤原永手の死後は藤原氏の中心的人物となった。

### 藤原百川

【ふじわらのももかわ】(732~779)

- 藤原宇合の第8子。良継の異母弟。
- 宇佐八幡宮神託事件では、和気清麻呂の裏で暗躍したという。
- 山部親王(のちの桓武天皇)の立太子に尽力したが、即位を見ることなく死去。

### 桓武天皇

【かんむてんのう】(737~806 / 在位 781-806)

- 仏教が政治に影響を及ぼすことを嫌い、長岡京遷都の際、平城京からの寺院の移転を許さなかった。
- 仏教が鎮護国家の役割を果たすために、新しい仏教指導者の出現に期待をかけ、最澄に中国で学ぶことを命じる。

### 最澄

【さいちよう】(767~822)

- 平安時代初期の僧。日本天台宗の祖。伝教大師。
- 804年 唐にわたり天台教学の奥義を学ぶ。
- 学問を中心とした南都仏教と対立、実践を重んじ国家に対して仏教の自立を目指す運動を続けた。

### 空海

【くうかい】(774~835)

- 平安時代初期の僧。真言宗の祖。弘法大師。
- 804年、唐に渡り、観音寺(青龍寺)の恵果に学び、真言密教を日本にもたらす。
- 816年、高野山に金剛峰寺、823年、京都に教王護国寺(東寺)を開く。

